
【宴という祭】

神崎慧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【宴という祭】

【Nコード】

N4703J

【作者名】

神崎慧

【あらすじ】

理由はない。ただ、気が付いたらソレに参加させられていた。

（前書き）

救いの無い物語。ただ、それだけです。

どうしてこんなことになったんだろう。

誰が発信源かなんてことはわからないけど、結構いろんなところで使われているこのセリフを実感するとは思ってなかった。

目の前で起こっているのは、どう考えても現実離れしている。少なくともここ、日本という国においては。

確かに、知識としては知っていた。

だけど今時、こんなモノが現実として存在しているとは思わなかった。

どうして、こんなことに。

本当に、何を間違えたのか分からない。

そもそも私は、何かを間違えたのか？

何か、やってはいけないことを、やってしまったのか？

あるいは、見てはいけないものを、見てしまったのだろうか。

悲鳴。

響きつづける、泣き叫ぶ声……いや、もはや音といった方が正しいかもしれない。

それは、あまりにも掠れてしまい、声として認識は出来ないものになっていた。

人がこんな声を出せたのか、とそんなことを考える。

明らかに、現実逃避だけれど……。

それでも、そうでもしなければ、私自身を保てそ……。

「う……っうえええ」

吐き気を抑え切れず、胃の中のモノをぶちまける。

喉が焼けるような痛みを発し、それによって咳き込んでしまう。

その音に気付いたヤツがこちらに視線を向けるけど、すぐに興味を失ったように、その行為を再開する。

いつの間にか、音が止んでいた。

無音という意味ではなく。

息遣いや、行為から発生する音が続くだけで、悲鳴などの音は、聞こえなくなっていた。

ぶれる視界を向けると、もうやられるがままに身を委ねているらしい。

諦めた、ということだ。

疲れ果て、しかし助けなどを期待できず、為す術を失った……そんな感じだった。

確かに、その通りかもしれない。

抵抗して、どうにか出来るとは思えない。

ここに助けが来るなんて、考えられない。

何かが出来るなんて、想像も出来ないのだから。

だからこそ、諦め。

必死に逃れようとした、成れの果てだった。

次は、私があなってしまうのは、あまりにも容易に想像できる。

出来てしまう。

怖い、と素直に思った。

だけど、自分だけが助かるなんてことは、思うことも出来ない。

この状況では、その考えこそが非現実的だった。

皮肉だ。

ああ、彼女の番が終わったらしい。

縛られたまま気絶している彼女を放置して、彼等は私の方に歩いてくる。

私を『使う』ために。

にやにやと気持ち悪い笑みを口に浮かべながら、ゆっくりと私に對してその手を伸ばした……。

（後書き）

今回の物語は、ただただ後味の悪い、救いの無い物語になってしまっています。

気分を害してしまったのなら、すみませんでした。

何が行われていたかをしっかりと描写していませんが、何となくでも伝われば、と思います。

確かに、物語として救いを入れて書くことは可能だったと思います。

しかし、今回はその救いを与えず、そのまま終了させました。

というのも、こういった場に於いて、そういったモノを期待できることは、奇跡のような確率しかないのでは、と思うのです。

そして、その後に相手が逮捕されたからといって、どうにかなることでもありません。

結局、何かの形で自分に折り合いを付けるのが、こういったものの結末なのではないか、とそう思います。

そんな考えの果てが、この物語の結末を生み出しました。

後日談として『救う』ことは出来るかもしれませんが、書くかどうかは不明です。

まあ、私自身、『救い』の無い物語を好きではないので、何らかの形……例えば別の物語の中などで書くかもしれませんが、これはこれで、ひとまずは終わりとさせていただきます。

こんなところまで読んでいただき、ありがとうございました。

何か思うところがあれば、気軽に言ってくだされば幸いです。

それでは今回はこの辺で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4703j/>

【宴という祭】

2011年1月16日09時29分発行